



# 更生 刻々

法務省東京矯正管区更生支援企画課

☎048-600-1560 (直通)

✉ 1.toukyoukyousei.j7u@i.moj.go.jp

ホームページ

[http://www.moj.go.jp/kyousei1/  
kyousei08\\_00101.html](http://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei08_00101.html)



第13号

令和4年7月29日発行

## すずなりの人々 熱気は3年分

第62回全国矯正展 2日間で7,000人超

受刑者が手掛けた日用品などを展示販売する「第62回全国矯正展」が、6月4～5日、東京都千代田区の科学技術館で開かれました。コロナ禍の影響で20年と21年は中止となり、開催は3年ぶり。

全国矯正展は、「社会を明るくする運動」の一環として、再犯防止に向けた矯正施設の取組の紹介などのほか、全国の刑務所で受刑者が社会復帰をめざして作った製品の展示販売を行いました。矯正行政の現状について広く知っていただくことを目的にしています。

製品は品質が高いのに、値段はお手ごろなので大人気です。家具類や革靴・文具類まで5つのコーナー別に並べられました。少年院・少年鑑別所・犯罪被害者支援・法務行政広報の各コーナーでは、現状を分かりやすく解説した展示や配布資料があり、交流の場となっていました。

少年鑑別所の簡易バージョンの性格テストが受けられる「体験コーナー」には小さな列ができていました。質問に「はい」「いいえ」で答えていくと、性格テスト結果がスピーディーに渡されます。「合ってるよお」「思っているのと違う」。仲良しの2人の間で新しい話題が広がっていたようです。

法務省によると、2日間で7千人超が訪れました。売り上げの一部は犯罪被害者支援団体への支援などに充てられます。



イベントには、法務省の特別矯正監を務める杉良太郎さん、矯正支援官の石田純一さん、EXILE ATSUSHIさん、桂才賀さん、ゴルゴ松本さん、コロケさん、清水宏保さん、Pai X<sup>2</sup>さんが出て、会場を盛り上げた。

## コンセプトは オーダーメイドとライフスタイル

### 横浜刑務所 地域に密着した「社会貢献」

なにげない社会生活の中に、さりげなく真実をしのばせる小説の名手、三浦しをんさんの本屋大賞受賞の「舟を編む」。若い女性編集者が、「辞書に『下駄箱』が載っているのが不思議」ともらします。それを聞いたベテラン編集者がショックを受け、議論になる場面があります。

それでも下駄箱は玄関の顔です。下駄箱を見れば、子どもたちの生活ぶりが分かります。

横浜刑務所では、神奈川県内の小中学校の下駄箱を作っています。元気のいい子どもたちがががをしないように、木材の角を丸める配慮がしてあります。

もちろんオーダーメイド。学校間の口コミで需要が広がっているらしいのです。

ごみ減量を進める三浦郡葉山町の手助けもしています。自宅から出る生ごみを土の中の微生物の働きで処理するのは、環境派のライフスタイル。ベランダなどに置くこの生ごみ処理容器も作っているのです。



受刑者に制作指導をしている横浜刑務所の栗村作業専門官＝写真＝は、製作品が大事に使われていることを受刑者に伝えると、「彼らも控えめに微笑みます」といいます。

間接的ながら刑務所の住民への社会的な貢献は、そっと隠れたところにあります。地域に開かれた矯正施設をめざしています。



## モノづくりを通じた自分で考えることの重要性

### 更生支援を語る



平成6年に拝命して以降、横浜刑務所一筋29年。洋裁工場を担当。

作業専門官の仕事ってどんなものですか？

受刑者が行う作業や職業訓練等の指導をする仕事で、技術的なノウハウのほか、安全作業の習慣を身に付けさせる案内人といったところでしょうか。また、一企業の経営者でもあり、営業といった側面を持つ仕事でもあります。コロナ禍の始めのころ、医療用のガウンを作ったのです。

新型コロナウイルスの感染が広がった初期の頃、社会貢献作業として、医療用アイソレーションガウンを刑務所で作り、県下の医療機関に届けました。通常、刑務所は、民間から受注した作業を行っているので、作業内容を大幅に変えることは簡単ではありませんが、このときはやはり業者さんに頭を下げて事情を説明し、ガウンの製作を優先させてもらったのです。ただ、ガウンを少しでも多く、少しでも早く医療機関にお渡しするためには、多くの刑務所で製作する必要があります。そこで、他の刑務所でも可能な限り製作できるように、作業専門官のネットワークを構築し、他施設分の生地の裁断を当所が担ったり、技術的な助言を行うなど、多くの施設と協力しながら取り組みました。

あのときは、医療機関が非常に大変な状況だと聞いていたので、何としてでも役に立ちたいという思いでした。作業する受刑者の反応はどうだったのでしょうか。

少しでも医療機関の助けになりたいという思いは、受刑者も抱いていたので、彼らのモチベーションは非常に高かったですね。多くの受刑者は、ガウンの製作を通じて、微力であっても社会の役に立てることを喜んでいました。

この気持ちは社会に戻った後も忘れないでほしいです。作業専門官として心がけていることは何でしょうか。

モノづくりを通じて、考えることの重要性を学んでもらいたいと思っています。そのため、作業上の問題が起きてもあえて全てを教えず、まずは自分で考えさせていきます。これは社会に戻った後にも必要なことだと考えています。



### 更生小考

「14歳の君へ」

君たちは、第71回社会を明るくする運動の作文コンテストに応募してくれたよね。その君たちにエールを送りたい。「14歳の君へ ~どう考え どう生きるか~」の著者池田晶子さん風に。ということで、「14歳の君へ ~立ち直りをどう支え どういう大人になるか~」。

まず、君たちは、身近なところから立ち直り支援について考えてくれているね。それはとても大事なことなんだ。出発すべきところはそこだし、行き着くところもそこになる。犯罪から立ち直るには、地域が大切なんだ。かけがえのない生活の場だからね。君たちの姿勢はとっても心強い。

「私たちにできる事がある。身の回りから、あたたかい地域の『軸』を作る事だ」(大分県中1)。「地域の力」を合わせる。「地域の軸」を作る。インクルージョンだね。すべての人を丸ごと社会で受け入れること。そして、この「社会」というのは、一人ひとりの思いが集まったひとつの「観念」なんだ。モノのように自分の外にあるものじゃない。みんなの「内」にあるものなんだよ。

君が社会を誰一人取り残さないものへと変えようとする場合、まず自分が変わるべきなんだ。現実をつくっている観念が変わらなければ、現実是不会変わらないということだよ。

世間には、その人を規定しようという視線、「まなざし」がある。偏見って言うてもいいだろう。差別というてもいいかもしれない。やっかいな相手で、退治するのはなかなか難しい。人と人の関係の薄さや、みんなの無関心が、孤独を抱えている人を追いつめることもある。

でも、実はいい手があるんだ。君たちの学校にもあるかな。「あいさつ運動」だよ。つまり声をかけることだね。孤独の冷たいバリアを溶かす魔法の言葉になる。運転手のおじさんに大きな声であいさつしたら、「おはよう」と手を振ってもらえた。こんな経験を書いてくれた入選者がいたね。思いのこもったあいさつは、心の間口を広げる。

もうひとつ、心を動かす魔法があるんだ。それは共感の力。バリアを飛び越えて人と人を結ぶ。

「前科があっても…必死に働こうとしている人もいます。そんな人たちにとって、自分を受け入れてもらえることは、どんなにうれしいことでしょうか」(愛媛県中3)。この人は自分の中にできないことがあって、ひどく悩んでいたんだ。父親や先生がそのまま受け入れてくれ、「心が軽くなった」。そういう経験があった。だから、今、言える。「『一緒にがんばろう』という声を、私はかけたいです」。

立ち直りにたたずむ人たちが待つその時はいつ来るんだろう？「私はその答えを『社会全体の目があたたかくなった時』だと思っている。罪を犯した人への差別がなくなり、あたたかく迎え入れる社会になった時だ」(大分県中1)。

さて、君たちはこれから自分の人生を生きる。みんなは思っているよね。「本当にカッコイイ大人に」(青森県中3)なりたいて。今の世の中、「本当にカッコイイ大人」が少ないってことかもね。どうやって生きてゆけばいいのかわからない大人がいっぱいいるのかもね。

何にしても一瞬だけ思うことはたやすい。「考える」ことを持続しよう。そこには君がつくった価値が生まれる。人の立ち直りを考えることができる人が、くすんだ人生を送ることはいらないはずだ。だって君たちはもう物事に向き合う力を持ち始めているのだから。だから、きつとなれる。「本当にカッコイイ大人に」。